研　究　紀　要

進 路 指 導 部 会

第５０回青森県高等学校教育研究会進路指導部会研究大会

全体講演　「『新しい時代を切り開く力』を育む進路指導・キャリア教育の在り方」
文教大学　教授　新 井 立 夫 …… 1

［第１分科会（進学指導）］
研究発表①　「生徒が自走できる進路指導を目指して」
青森県立青森東高等学校　進路指導主事　赤 平 紘 文 …… 4

研究発表②　「本校の進路指導について」
学校法人舘田学園五所川原第一高等学校　進路指導主事　佐 藤 大 輔 …… 8

［第２分科会（就職指導）］
研究発表　「地域に学ぶ進路指導ー進路選択力の育成を目指してー」
青森県立むつ工業高等学校　進路指導主事　傳 法 宏 美 …… 12

部会の動き…… 14

研究テーマ…… 16

紀要編集委員　瓜 田 敦 也（青森県立五所川原高等学校）

進　路　指　導　部　会

全体講演

『新しい時代を切り開く力』を育む進路指導・キャリア教育の在り方

文教大学
教授　　新井　立夫　氏

はじめに

令和８年度青森県高等学校教育研究会進路指導部会研究大会において、文教大学教授新井立夫氏による講演「『新しい時代を切り拓く力』を育む進路指導・キャリア教育のあり方」が行われた。本講演は、人生 100 年時代や AI 時代の到来など、急速に変化する社会の中で、高校教育における進路指導及びキャリア教育をどのように再構築していくべきかを主題として展開された。講師は自身の高校教員時代の経験、大学教員としての研究成果、さらには企業での勤務経験を踏まえながら、高校教育に求められる役割について具体的な事例を交えて論じた。

1. 人生 100 年時代の到来と進路指導の変容

まず、社会における働き方の変化について指摘した。かつては終身雇用を前提とし、一つの企業に長期間勤め続けることが望ましいキャリアモデルとされてきた。しかし現在は転職やキャリアチェンジが一般化し、働き方の選択肢そのものが大きく広がっている。その背景には人生 100 年時代の到来がある。平均寿命の延伸により、人々は従来よりも長い人生を生きることになった。その結果、一度身に付けた知識や技能だけで人生を全うすることは難しくなり、学び直しや再教育が重要な意味を持つようになったのである。このような状況において進路指導を従来の「卒業後の進学先・就職先決定」とだけ捉えることは不十分である。高校卒業後の進路決定は人生全体の一部分であり、その後も継続的に学び続け、自ら進路を選択し直す力が必要になる。



したがって高校教育の役割は、進学か就職かを決定させることだけではなく、生涯を通じて自己のキャリアを形成していく力を育成することにある。

2. キャリア教育と進路指導の関係

キャリア教育と進路指導の関係について整理した。進路指導とは、進学や就職など卒業時の進路選択を支援する教育活動である。一方、キャリア教育とは、生涯にわたる生き方や働き方を支える教育活動である。両者はしばしば別のものとして語られるが、本質的には同じ方向を向いている。進路指導はキャリア教育の一部であり、キャリア教育の目的を実現する具体的な活動として位置付けられるのである。 高校現場では、しばしば大学合格実績や就職内定率が重視される。しかし、それだけを教育成果と捉えることには限界があるたとえ希望する進路を実現できたとしても、その後の社会生活の中で主体的に生きられなければ、本当の意味でのキャリア形成ができたとは言えない。

生徒が卒業後も学び続け、自らの人生を設計し続ける姿勢を育てることこそ、現代の進路指導に求められる使命である。

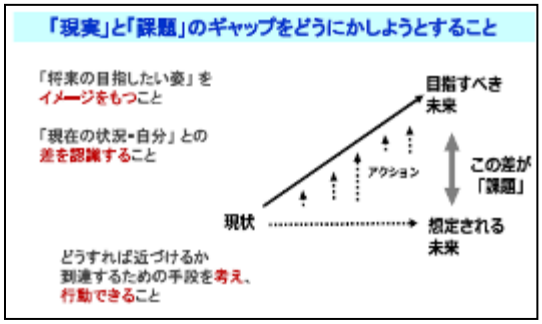
3. 主体性とは何か

現在の教育改革では「主体的な学び」が重視されている。しかし、「主体性」という言葉がしばしば誤解されている。主体性とは単なる自由ではない。好き勝手に行動することでもない。自ら考え、自ら判断し、その結果について責任を負うことである。そのため主体性を育成するためには、生徒自身が決定する経験を積み重ねる必要がある。教員があらゆる場面で答えを与えてしまえば、生徒は判断する機会を失う。反対に放任してしまえば適切な成長は期待できない。重要なのは、生徒が自分で考える機会を保障しながら、必要な場面では教員が伴走者として支援することである。

主体性は講義だけで身に付くものではない。学校行事、部活動、探究活動、日常の授業など、様々な教育活動の中で試行錯誤を繰り返す過程を通して形成されるのである。

4. 自立とは何か

主体性と並んで重要であるのが「自立」である。一般的には、自立とは他者の助けを借りずに生きることと理解されがちである。しかし、その理解は不十分である。社会的・職業的自立とは、必要な支援を適切に求めながら自己実現を図ることである。社会の中で生きる以上、人は必ず他者との関係の中で生活している。困難に直面した際、適切に相談できること、協力を求められることも重要な能力である。一人で全てを抱え込むことではなく、周囲との協働を通して課題を解決することが現代社会における自立の姿である。高校においても、生徒が他者と協働しながら学ぶ経験を充実させることが重要である。その意味において、探究活動やグループワークなどは単なる学習手法ではなく、社会的自立を促す教育活動として位置付けられる。



5. 自己肯定感と自己有用感を再考する

講師は近年の教育現場で頻繁に用いられる「自己肯定感」という概念についても考察した。自己肯定感を育成することの重要性は広く認識されているが、その解釈や活用のあり方については慎重な検討が必要である。一般に自己肯定感とは、自分自身を価値ある存在として認める感覚を指す。しかし講師は、自己肯定感を単に「今の自分をそのまま肯定すること」と理解することには危険性がある。教育の目的は、現在の自分を受け入れることだけではない。より良い自分を目指して成長し続けることにある。もし自己肯定感の名の下に努力や挑戦が軽視されるならば、それは本来の教育の目標とは異なる方向へ進むことになる。

近年の学校現場において「褒めて育てる」ことが過度に重視される傾向がある。もちろん、生徒の努力を認めることは大切である。しかし、「遅刻しなかったから褒める」「課題を提出したから褒める」といった指導が常態化すると、本来当たり前の行動と努力によって達成された行動との境界が曖昧になる可能性がある。教育においては、生徒の努力や成長を認めながらも、社会の中で求められる規範や責任について明確に伝えることが必要なのである。そのため講師は、自己肯定感だけでなく自己有用感の育成が重要である。自己有用感とは、「自分が誰かの役に立っている」「自分の存在が集団に貢献している」という感覚である。社会の中で生きる以上、人は他者との関わりの中で自己を形成する。自分の行動が周囲に良い影響を与えた経験や、自分の存在によって誰かが助けられた経験は、自己肯定感以上に強い成長の原動力となる。

したがって学校教育には、生徒が他者のために行動したり、集団の中で役割を果たしたりする機会を意図的に設定することが求められるのである。

6. 失敗経験とレジリエンスの育成

社会の変化が激しい現代において、生徒に求められる資質としてレジリエンス（困難から立ち直る力）が大変重要である。人生において失敗や挫折を完全に避けることはできない。むしろ社会に出てから直面する困難の方が、高校時代の失敗よりもはるかに大きい場合が多い。その意味で学校は、安全な環境の中で挑戦と失敗を経験できる貴重な場である。紹介したスポーツ指導や企業人材育成の事例のように、人は困難を経験し、それを克服する過程で成長する。

「成功体験だけでは人は育たない」。成功体験は自信につながる。しかし、自信だけでは将来の困難を乗り越えることはできない。むしろ失敗した経験を振り返り、自ら改善策を考え、再び挑戦する経験こそが真の成長につながる。高校教育においては、失敗を避けさせるのではなく、失敗から学ばせる姿勢が求められる。学習面でも部活動でも生徒会活動でも、結果だけでなく過程を振り返る機会を設けることが重要である。その積み重ねが、生徒のレジリエンスを育成するのである。

7. 探究学習の本質

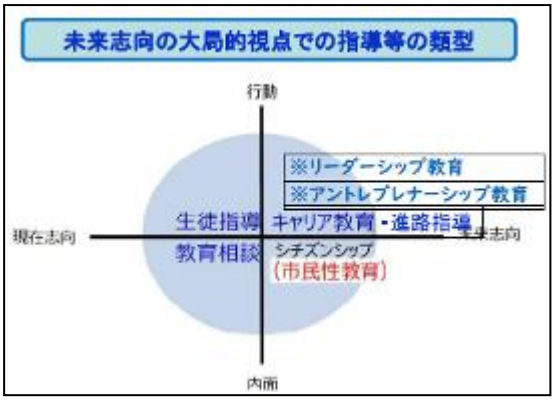
探究学習は単なる調べ学習とは異なる。調べ学習は既知の情報を収集することが主な目的であるのに対し、探究学習は自ら問いを立て、その問いについて考え続ける過程そのものに価値がある。現在の探究学習に対して一定の課題があると認識している。多くの学校では探究活動の成果発表会が行われている。しかし、本来の探究は短期間で明確な答えが出るものばかりではない。答えが見つからないことも含めて探究なのである。したがって、探究活動を単なる成果発表のための活動として位置付けるのではなく、「問い続ける力」を育成する学習として捉える必要がある。また、探究活動を通し

て身に付けるべき能力として「課題発見力」、「情報収集力」、「分析力」、「論理的思考力」、「表現力」、「協働性」、「主体性」がある。これらの能力は大学進学後だけでなく、社会人として生きる上でも不可欠な能力である。探究学習は将来の研究者育成のためだけに存在するのではない。社会の中で課題を発見し、自ら解決しようとする人材を育成するための教育活動なのである。

8. アントレプレナーシップ教育の意義

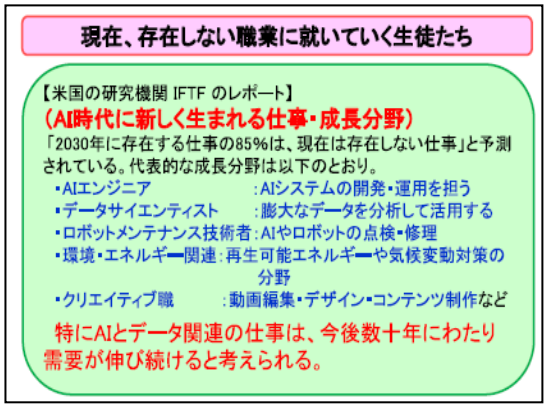
探究学習と関連して、近年注目されるアントレプレナーシップ教育がある。一般にアントレプレナーシップというと起業家教育として理解されることが多い。しかし、アントレプレナーシップを単なる起業の技術として捉えるべきではない。アントレプレナーシップとは、新しい価値を創造しようとする姿勢である。それは企業を設立することだけではない。学校においても、地域社会においても、職場においても、現状の課題を発見し、改善しようとする姿勢そのものがアントレプレナーシップである。現在の社会では、既存の知識を覚えるだけでは十分ではない。未知の課題に対して自ら考え、解決策を提案し、行動できる人材が求められている。その意味でアントレプレナーシップ教育とキャリア教育は極めて親和性が高い。

学校教育の中で生徒が主体的に課題解決に取り組む経験を積み重ねることが、これからの社会を支える人材育成につながる。



9. AI 時代に求められる人間の役割

現在すでに多くの業務が自動化されており、今後も AI による代替は進むと考えられる。しかし、それは人間の仕事がなくなることを意味するわけではない。むしろ人間にしかできない役割がより重要になることを意味している。「創造力」、「共感力」、「コミュニケーション能力」、「判断力」、「倫理観」、「協働性」これらは AI が容易に代替できない能力である。また、情報が容易に入手できる時代だからこそ、情報を批判的に検討する姿勢が必要である。AI が示した情報を鵜呑みにするのではなく、自ら考え、判断し、活用する力が求められるのである。そのため学校教育には、知識の習得だけでなく思考力や判断力を育成する役割が一層期待される。進路指導においても、生徒が将来どのような社会で生きることになるのかを踏まえた指導が必要になる。



まとめ

講師は、講演の最後に、これからの進路指導・キャリア教育の本質は、生徒が自らの人生を主体的に切り拓く力を育成することにあると改めて強調された。進学や就職は人生の一つの通過点に過ぎない。人生 100 年時代においては、生徒は卒業後も学び続け、多様なキャリアを形成していくことになる。そのため高校教育には、知識や技能の習得だけでなく、主体性、自立、協働性、探究心、創造性などを育成する役割が求められる。

また、失敗を恐れず挑戦する姿勢を育てることも重要である。生徒が困難に直面したとき、自ら考え、周囲と協力しながら乗り越える力を身に付けることが、真のキャリア形成につながるのである。「できるかできないかではなく、できるまで挑戦することが大切である」という言葉をもって講演を締めくくった。

この言葉は、変化の激しい現代社会を生きる生徒に求められる姿勢を端的に示したものであり、今後の進路指導・キャリア教育を考える上で大きな示唆を与えるものであった。

【進 学 系 分 科 会】

研究発表①

「生徒が自走できる進路指導を目指して」

青森県立青森東高等学校　　赤平　紘文

1　青森県立青森東高等学校について

本校は今年で創立 65 年を迎える，大学進学重視型の普通科単位制高校で各年次は６クラス，男子 312 名，女子 400 名合計 712 名で，例年女子生徒が多い傾向がある。２年次から文理に分かれて，現在は２・３年次両方とも文系３クラス，理系３クラスに分かれている。

（1）スクールミッション

全日制普通科単位制を生かし，生徒一人ひとりの進路志望等に応じたきめ細かな教育活動や興味・関心を深める探究活動により，個性を伸長するとともに，地域と連携した多様な学びを通して，創造性や協調性を育み，自己の強みを生かしながら社会貢献を果たし未来を切り開く人材を育成する。

（2）グラデュエーションポリシー

右図のとおり（本校 Web ページより）



図１　青森東高校グラディエーションポリシー

（3）生徒の進路志望状況

現１年次の４月の調査では国公立大志望が 220 名（91.7%）であり例年入学してくる生徒の 90%程度が国公立大学進学を志望している。入学時は難関大志望も多く，北大志望 12 名，東北大志望 26 名と 20%程度が難関大志望の傾向がある。

現３年次の４月の調査では国公立大志望が 202 名（86.7%）であり例年３年次での国公立大志望は 80～85%程度である。　　一方難関大志望は数を減らし，北大４名，東北大６名と，大きく数を落とす。

（4）国公立大学の合格者数・合格率の推移

図２で示したように，合格者数も合格率は年次主導が強いので，上がり下がりもあるが，全体をみると上がり続けている。

その一方，表１において東北大学や北海道大学の合格者数に目を向けると，昨年度は合格者を出すことができていないことがわかり，そこに本校の課題がある

表１　青森東高校国公立大学合格者数推移

年度	回生	北海道大学	東北大学	弘前大学	岩手大学	国公立大計	クラス数
令和元年度	54回生	0	2	36	14	131	7クラス
令和2年度	55回生	0	2	36	14	146	7クラス
令和3年度	56回生	0	0	32	10	112	6クラス
令和4年度	57回生	2	2	35	9	148	6クラス
令和5年度	58回生	0	1	37	14	118	6クラス
令和6年度	59回生	0	2	47	12	154	6クラス
令和7年度	60回生	0	0	53	17	153	6クラス

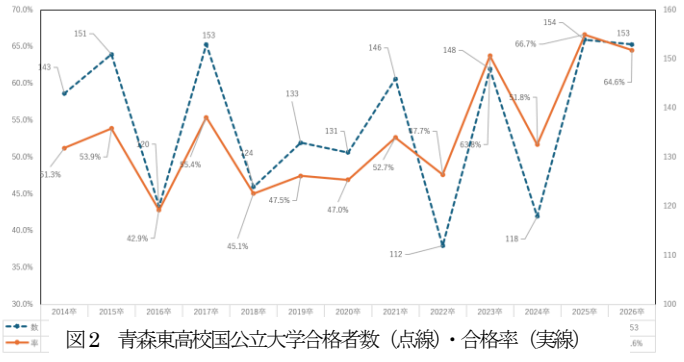


図２　青森東高校国公立大学合格者数（点線）・合格率（実線）

（5）推薦総合合格者数の推移

学校推薦・総合型での合格者数は本校において微増傾向だが，昨年度の推薦総合入試での国公立合格者数 73 名は県内 No,1 だった。

ただし，これは国公立大学の易化と，青森東高校の学力層がマッチした結果であり，国公立合格者数で各学校の取り組みの是非が問われる時代ではなくなってきていると考えている。

表２　青森東高校推薦総合合格者数の推移

卒業年度	令和７	令和６	令和５	令和４	令和３	令和２	令和元	H３０	H２９
回生	６０回生	５９回生	５８回生	５７回生	５６回生	５５回生	５４回生	５３回生	５２回生
国公立大	４８	２９	３６	４３	３３	３９	２５	２２	２１
私立大学	２５	３０	２７	２２	３３	２８	３１	１９	２３
計	７３	５４	６３	６５	６６	６７	５６	４１	４４

その一方で県内国公立大学の合格率は高いが　難関大や県外の大学の合格率が低かった。
よって課題は難関大志望の生徒を持続的に合格させられていないことにあると考えた。

表３　青森東高校令和７年度主な国公立大学の合否状況

	北海道大	北教大	弘前大	岩手大	東北大	茨城大	宇都宮大	筑波大	はこだて未来大	青森県立保健大	青森公立大	宮城大	国公立大学全体
受験	1	2	24	7	3	1	1	3	2	11	5	3	76
合格	0	2	20	4	0	0	0	2	1	9	5	2	48（63.1%）

（６）卒業生アンケートの実施

青森東高校進路指導部では毎年の卒業生にアンケートを実施している。質問数は22個あり，受験勉強をはじめた時期や講習や進路行事など進路関係についてのものを聞いている。特に気になるデータを発見したので共有する。

表４で示したように，通塾率はなぜか下がり続けていることがわかる。

あくまで体感だが，自習室などで動画で学習している生徒が増えてきているように感じている。

表４　青森東高校通塾率推移

通塾率		通信添削利用率
R7	31%	8%
R6	35%	5%
R5	47%	6%
R4	50%	9%

（７）本校の課題

以上のデータから本校の進路指導の課題についてまとめる。

・言われたことはやろうとする，課題はやるが自分で逆算して受験勉強を行うことは苦手
・難関大向の指導や添削や受験種別への対応は良くも悪くも年次主導
・推薦総合受験への保護者の期待は大きく，保護者の意見も生徒はよく聞く
・推薦総合指導担当について
　総合だけは担当者割をすべてやめても，結局優しい，声をかけやすい先生
　または教員側から動いて一部の教員に負担が集中する
　すべてについて担当者を振ると，担当者による指導差異が生じて問題も起きる

これらを改善すべく，今年度は「生徒が自走していけるような」進路指導を目指した。

２　自走を目指した取り組みについて

（１）１日本校の方向性について話合う会

2026年3月17日（火）授業も部活もすべて止めて職員全員で学校について話合う会を実施した。そこで出た組織のアクションプランから今年度が動きだす

・単位制のメリットを生かし，３年で文理選択
・自由選択で学習する時間を確保
・生徒主体の委員会（委員長を指名しては？）委員会を活性化
・単科で講習を開き，希望する生徒が受ける
・総探で縦割り出来ないかな？　先輩の手伝い
　（大学のゼミのように）　など

図２　青森東高校３月17日教員研修の様子



（２）自己決定講習（３年次のみ）

本校の講習は基本的に全員参加であったが，予備校の単科ゼミのような感じで教員がシラバスを書いて必要な生徒が受講するような形にした

前期放課後１　夏期講習　前期放課後２　土曜講習までは完全に単科とし，後期からは科目を絞り，冬期講習は演習と解説中心にしていくつもりである。

夏期講習終了後，アンケートを実施した。教員の63.7%は良かったと回答し，その理由として生徒のモチベーションが増したが１位，良くなかった理由としては教員個人の都合でスケジュールを組むので，生徒がとりたいと思う講習が重複してしまうことが課題であった。

また対象の講習終了後のアンケートでは３年次生徒の98.2%は良かったと回答した。良かった理由として，自由につかえる時間が増えたが１位。講習全体の満足度も５段階で96%の生徒が４以上の評価をしてくれていた。

図３　自己決定講習シラバスのイメージ


前期放課後講習Ⅰ　シラバス

教科	講座名	担当	定員	回数	講座内容・講座の目的	注意事項
日本史探究	日本史探究（中世ヨーロッパ特講）	森山 貴之	30	5	中世ヨーロッパの歴史に特化した講座です。	初回セットで受講してください。
日本史探究	日本史　基礎のおさらい	伊藤 浩祐	30	3	基礎の範囲をおさらいしプリントでおさらい	授業進度準拠
地理	センター試験頻出まとめ① （地形・農業）	安田 遥	60	4	これまで授業の行った地形・農業の分野を総まとめ（基礎プラス）	文理問題を混合で授業の行き方や上級会話文章で実施
公共、政治・経済	一神教と仏教	宇都野 圭人	60	3	仏教のルダヤ、キリスト、イスラーム、仏教のポイント講習	文理共通講座、仏教の教科書持参。
地理	日本地理	外崎 貴志	60	4	日本の政治経済分野の基本事項の確認と過去問演習	文理共同で実施　日本の教科書、資料集持参
生物基礎	どんとこい！生物基礎の計算問題①	工藤 勇哉	60	2	酸素解離曲線、緩衝の原理などの計算問題を解きまくる	参加者がとりたい分野まったく別の場合は上記にします
生物基礎	どんとこい！生物基礎の計算問題②	工藤 勇哉	60	2	酸素解離曲線、緩衝の原理などの計算問題を解きまくる	参加者がとりたい分野まったく別の場合は上記にします
化学基礎	はじまりセット	西山 瑛子	40	3	物質量（mol）の求め方、溶液と式と物質量、溶液作成ある反応	今いる状況次第がわからない人は行ってください。
英語	英語が話のない人のための読解演習	小角 大樹	40	5	模試問題を使って、基本的な読解方法について、解説と演習をしていきます。	授業後でも質問や相談ができること。
物理	基礎から話のある世界 ～物体の運動から力とその法則まで～	中田 陽志	60	5	等加速度運動・等比速度・斜面問題・力のつり合い・力のベクトルの分け方について式の書き方問題から入試レベルの問題まで扱い、幅広く基礎から発展的な力学・考え方を伝授します。	授業後に質問に来る人には、その化学習の必要と思われるもの
生物	入試なんて無理だと思われた私が、講習を受けたらトップになっていた件	前田 亮介	40	5	入試（中堅、難関、医歯薬）を見る一度授業に参加します。入試をやり直したい人向け、入試でどんな事が出るかそれをどう勉強して攻略もします。	しっかり説明しますので、初講座でもしっかり話を聞ける心身が必要です。
数学Ⅰ	標準総合	高木 恭輔	30	3	全方面の入試問題を解く上で必要な知識を身につけ、総合点の問題に備える	公式や学び方に最低限のランクの問題を基本に扱います。
数学Ⅱ	応用総合	野口 翔樹	30	3	難関国立から入試問題を解く上で必要な知識を身につけ、総合点の問題に備える	授業後の予習は１年次習っている方法はどちらを受講してください。

（3）進学力パワーアッププログラムの活用

本校では外部講師の小論文対策講習に毎年取り組んでいたが，その規模を縮小して，事業を切り替えた

ア　「生徒が自走できる進学型UDLの実践準備」　宮城県松山高等学校　教諭　市川　泰斗　氏

学校の本丸は授業改善であろうということで，東北大学で研究している市川先生を招聘（前期後期各１回）する。Universal Design for Learning（UDL）とはアメリカのCAST（Center for Applied Special Team）が提唱する指導のフレームワークである。授業UDと混同されやすいが，授業UDは授業者視点のため，異なる。UDLは視点の切り替えである。特別な指導法などはない。授業者視点ではなく，学習者視点で授業を構成していく。

前期は実施済みであり，後期も実施予定である。

図4　UDL研修　研究授業の様子



図5　UDL研修　県内学校に呼び掛けた教員研修の様子



イ　「生徒どうしで教えあう推薦総合指導研究」　西大和学園中学高等学校　教諭　梨子田　喬　氏

３年の講習は自由選択なので夏期講習の講座として推薦総合志望者を対象に開講した。ただし，目的は教員の勉強のためなので，教員の勉強のためYoutubeで共有して，生徒どうしで教え合う推薦総合指導をしていく空気を醸成していく。

１時間目　小論文　https://youtu.be/09rhiY_c4_I

説明→役割決め・説明で５分→説明は板書で指示→採点基準の設定→実際に採点・共有

その間も声がけ，説明のタイミング　定義について　構成についてなど　様子をみて声がけがあり

２時間目　志望理由書１　https://youtu.be/VJ-Fr_ZwyKw

キーワードからグループでどんどん広げて，足りない部分を自覚　ライフラインチャート　構成

３時間目　志望理由書２　https://youtu.be/JDdw3CmsODo

問い出しワーク　拡散と収束　ブレインストーミング　KP法

図6　梨子田氏による講習の様子



ウ　小論文講習会　7/25,1/26

７月 山形大学学術研究院教授　三上英司　氏

１月 第一学習社　須田　修　氏

（4）難関大志望の集団化（7組）

１・２年次の生徒の難関大志望者の集団化を目的として，考えた。教科主任会議を経て，実施も決定した。東北大などの問題を改題して協働的に問題演習を行う。なお，本企画の名称「7組」には，「旧帝国大学７校への合格を目指す，本校（1～6組）の『7番目のクラス』」という意味合いが込められている。この取り組みとは別に模試上位者対象の進路指導部面談も実施した。

（5）現地集合解散　東北大学OC&交流会

バス代・ホテル代の高騰により，生徒個人で新幹線でOCに行く方が安価な時代になったことで，年次から不要論が噴出し，２年間東北大OCへのバス参加がなくなり，おそらく再開しない状況となった。一方OC自体よりも，実は卒業生アンケートを振り返ると夜の卒業生との懇談会のほうが生徒の満足度が高かったことがわかった。

それなら現地集合解散にして会議室を借りて，OCに併せて卒業生との懇談会を実施すればよいのではと思い立って実行し，２年ぶりに復活した。OBも助教になっており大変盛り上がった。

（6）Handy進路指導室の活用（指定校推薦）

昨年度から，よいかもしれないと思って１年テスト運用を経て実行した。200件近くあるのに利用は10件以下の指定校推薦情報をクラウド管理指定校推薦書類をスクールサポートスタッフに処理してもらっている。

（7）AI が補助した調査書作成

本校の AI チームの３年担任山田先生がつくったものであり，総合探究の所見や，諸事項のたたき台として活用しているので共有する。

図7　プロンプトテキストデータへのリンク

（8）保護者セミナー

進路指導において，保護者との協働も必要不可欠なものとなっている。保護者セミナーとして，複数回実施して，保護者と生徒が協働していける土台をつくっている。

・３年次保護者向け「推薦総合受験説明会」「模試の見方とデータ分析」
・年次主催「お金の説明会」「受験生の保護者として」
・１年次保護者向け「進路指導説明会」など

図8　復活させた進路通信



（9）進路通信の復活

探究に時間をとられ，進路指導の時間は減っている実感があったので，しばらく作られていなかった進路通信を復活，月一回ペースで更新を続けている。生徒には白黒両面印刷，保護者には Classi で配信と Web で公開中である。私も毎月コラムを書いている。

(10) 卒業生による模試監督（スクールサポートスタッフ）

令和７年度（昨年度）から卒業生による模試監督バイトをお願いしている。令和８年度（今年度）は各年次ごとにバイトリーダーをお願いしている。バイトリーダーに人数だけ依頼して，人の調整はリーダーが行う。（リーダー代も年額で支出）税理士さんに相談しながら進路会計規約を改定し，所得税は学校でまとめて支払いをする。

年度末に源泉徴収票も税理士さんに作成をお願いしている。

令和７年度卒　13 名　　令和８年度卒　27 名

これにより３年次の模試は本部１名，教員１名とし，他は卒業生で回すことにより教員の負担減を実現している。

このつながりを維持して探究活動でも活用していく方向を目指している。

３　まとめ

このように，生徒が自走できる進路指導を目指してきたが，「自走を目指している」だけで，達成できていない。一方で前期だけでも様々な取り組みを実施することができた。普通科改革であるデータサイエンス学科に対しても真正面から取り組みながら，本当に生徒が自走していけるような進路指導を今後も目指していきたい。

研究発表②

「本校の進路指導について」

学校法人舘田学園五所川原第一高等学校
佐藤　大輔

1 はじめに

本校は今年で創立 78 年となり，令和 10 年で創立 80 周年を迎える。本校の基本理念は，建学の精神に基づき，多様化する社会に対応するため「確かな学力」を身につけ，進路実現に向けて意欲的に学習に取り組む生徒を育てる。また、健康で逞しく，規範意識が高く，自他を尊重する豊かな人間性を備え，主体的かつ協働的に取り組む資質，能力を身につけた生徒の育成を目指している。

今年度より「生徒が主役の学校」とするため、コースの再編とともに 5 つの NEW を導入した。本校生徒が希望する進路として，大学，短期大学，専修・各種学校，職能施設，公務員，就職と非常に多岐にわたっており，多様化する進路希望に対応するため，多角的な進路指導プログラムを展開する必要がある。そのため，進路指導においてもこれまでの流れを踏襲しつつ，新たな企画や試みを取り入れ，生徒一人ひとりの進路に寄り添った取り組みを実践している。

2 学校概要について

（1）教育方針

①建学の精神…「勤勉、誠実にして　心と体の調和のとれた　社会に有為な人材の育成」
②校訓…明朗・協調・進取
③二大目標…「青森県第一の進学校になろう」，「青森県第一の資格取得校になろう」

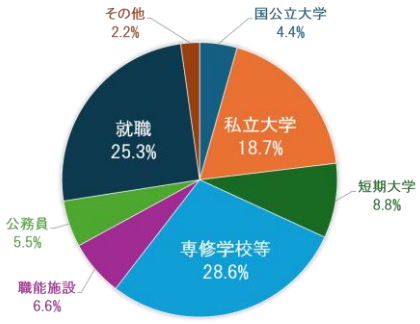
（2）本校の概要

①沿革…昭和 23 年（1948 年）4 月 7 日五所川原家庭寮として創設
昭和 24 年五所川原家政学院に改称，昭和 32 年家政高等学校（被服科）併設
昭和 48 年五所川原第一高等学校に校名を変更（4 月 25 日を創立記念日とする）
昭和 63 年特別進学コース，平成 11 年進学コース，平成 20 年情報ビジネスコースをそれぞれ開設
平成 21 年通信制課程を開設
令和 8 年現在創立 78 年（令和 10 年で創立 80 周年を迎える）
全日制課程普通科においてコースの再編を行い，従来あったコースから新たにキャリア探究コースと進学探究コースの 2 つのコースとなり，現 1 学年からスタート
②学級数…全日制普通科各学年 3 クラス，全校生徒数は 215 名（令和 8 年 9 月末現在）
③授業…45 分授業，週 30 単位（月～金 6 コマ），三学期制
毎朝 8:40～8:55 までの G1 タイムあり（15 分間）

（3）令和 8 年 3 月卒業生の進路状況

大別すると進学が 3 分の 2，就職が 3 分の 1 である。ここ数年では進路実績をみても同様の割合で推移している。進路全体の中で専修・各種学校等の割合が最も多い。

本校生徒の進路希望は非常に多岐にわたっており，多様なキャリア希望に寄り添った進路指導が求められ，指導の難しさを日々感じている。



（4）過去３年間の主な進路実績（進学実績のみ）

＜国公立大学＞
弘前大学、青森公立大学、青森県立保健大学、都留文科大学
＜私立大学＞

弘前医療福祉大学、柴田学園大学、弘前学院大学、青森大学、青森中央学院大学、八戸工業大学、東北学院大学、
東北文化学園大学、東北福祉大学、獨協大学、國學院大學、大東文化大学、国士舘大学　他

＜短期大学＞

弘前医療福祉大学短期大学部、柴田学園大学短期大学部，岩手県立大学盛岡短期大学部、仙台青葉学院短期大学　他

＜専修・各種学校等＞

弘前市医師会看護専門学校、S.K.K.情報ビジネス専門学校、青森県ビューティー＆メディカル専門学校、
青森県営農大学校、東北メディカル学院、日本工学院専門学校　他

＜職能施設＞

東北職業能力開発大学校附属青森職業能力開発短期大学校、弘前高等技術専門校　他

3 進路指導部の基本方針について

（1）３年間を通した進路指導の体系化を図り，希望進路の達成に向けて生徒の意識の高揚に努める。

（2）生徒の大学合格や就職内定に向けて，教員による大学研究，入試問題研究，小論文・面接指導研究などを推進し，教員の指導力強化を図る。

（3）学級担任のみならず，授業担当者，学年，コース，進路指導部の連携のもと，一人一人の生徒の進路達成に努める。

4 進路年間スケジュールについて（進路指導部主導の行事）

全体目標：生徒が自己の生き方を考え，主体的に進路を選択し実現できるよう，教育活動全体を通して，計画的，組織的な指導を行う。

月	行　事
4	休み明け実力テスト,保護者対象奨学金ガイダンス
5	進路希望調査①，学習状況調査①，公務員受験ガイダンス，進路ガイダンス①(2年)
6	公務員模試，就職希望者受験ガイダンス，県内外企業鋪問，就職情報交換会
7	進路ガイダンス①(1・3年)，夏期補講
8	休み明け実力テスト
9	キャリア創造プログラム(職業人講話，インターンシップ，研究発表会)大学入学共通テストガイダンス
１０	進路ガイダンス②(2年)
１１	進路希望調査②，学習状況調査②，進路ガイダンス②(県内企業ＰＲイベント及び若手社員等との座談会)(1年)
１２	進学講演会，模擬試験結果分析会，冬期補講
1	受験報告会，国公立大学判定会議及び二次対策立案
2	公務員模試,進路総括アンケート
3	進路総括，進路ガイダンス③(1・2年)

（補足１）その他の進路行事について

上記以外にも学年やコースが主導する形で進路に関する行事を実施しており、進路指導部としても協力している。

（補足２）模擬試験の実施について

進路指導部が業者模試（全員受験及び希望者）の企画や運営を行っている。年間で1学年は3回，2学年は6回，3学年は8回を計画し，実施している。

5 進路指導の取り組み

（1）積極的な情報発信　～進路情報の共通理解～

①「進路のしおり」の作成と活用

②「進路指導室」の開設と活用

③「進路だより」の発行と配信

④進路情報の提示と共有（BLENDやロイロノートの活用）

（2）調査や分析　～多面的な実態把握～

①進路希望調査，学習状況調査の実施（5月と11月の年2回）

②模擬試験結果分析会の実施

（3）個に寄り添う進路指導　～伴走型の指導～
①「個別の進路指導計画」の作成と運用
②「小論文やプレゼン対策」の実施
③面接指導を中心とした受験指導の実施
④個人面談の実施と充実
（4）進路意識の高揚　～進路実現に向けた意識改革と視野の拡大～
①進路ガイダンスの実施（各学年各学期に1回ずつ）
②進学講演会の実施
③受験報告会の実施
（5）自己分析と基礎学力の醸成　～学力を測り、基礎固め～
①模擬試験や実力テストの運営と実施
②夏季および冬季補講の運営と実施
（6）キャリア教育の充実　～社会的・職業的自立を促す～
①キャリア創造プログラムの実践（職業人講話，インターンシップ（職場見学や体験），発表会）
②県内外企業PRイベントの実施
③総合的な探究の時間との有機的な連動
（7）G1タイム　～新たな進路指導の形の導入～

※ 個別の進路指導計画について
今年度より，新たな進路指導の試みとして「個別の進路指導計画」を導入した。本計画は，生徒一人一人の教育的ニーズに沿った指導の実現と関係機関との連携ツールとしての活用を目的としている。特に国公立大学志望者に対してきめ細やかな教科指導を展開し，基礎学力の定着を図るものである。なお，これは特別支援教育における「個別の教育支援計画」等とは異なり，あくまで本校独自の取り組みである。
計画には「指導目標」「指導内容」「指導方法」等を盛り込み，生徒の基本情報は主に担任が，具体的な指導内容は各科目担当者が生徒と確認しながら設定する。さらに，学期ごとに評価や見直しを行い，全教職員での共通理解を図っている。
現時点では国公立大学を志望する3年生5名を対象に運用しているが，実際に運用する中でメリットとデメリットの双方が見えてきた。今後はこれらを検証し，より有効な活用方策について引き続き検討を重ねていきたい。

※ キャリア創造プログラムについて
今年度，キャリア教育の充実を目指し，2年生が主体となって五所川原「エルムの街」と連携した独自の3日間のプログラムを企画した。9月の大雨による休校で一時延期となり，生徒からも惜しむ声があがった。従来の単発的なインターンシップから脱却し，事前の講話や事後の発表会を一体化する形を計画した。地域密着型の深い学びと，進路行事の効率的な統合の実現を図るものである。

※ G1タイムについて
G1タイムとは五所川原第一高等学校オリジナル学習タイムであり，生徒の学習意欲を高めるとともに情報を正確に受け取り，理解し，分析する力を育成するという趣旨のもとで実施している。
また，この活動を通して、探究活動に必要とされる「課題発見」，「情報収集」，「整理・分析」，「表現・共有」の各段階に対応した基礎的な能力を育てることを目的としている。
対象は全校生徒で，実施時間は8:40から8:55までの15分間である。
特別な行事がある際や考査期間を除いて，基本的には毎日，月曜から金曜までそれぞれのテーマに基づいた取り組みを行っている。これらの活動を通して，語彙を増やしたり，進路における文章作成に活かしたりなど進路実現を支える基礎をこの時間でつくっている。

7 その他
（1）高大連携事業
＜連携事業先＞

学校法人弘前城東学園弘前医療福祉大学・同短期大学部
学校法人柴田学園柴田学園大学・同短期大学部
東北職業能力開発大学校附属青森職業能力開発短期大学校

＜事業内容＞

主な事業内容の例としては，大学・短期大学見学会における校舎見学や模擬授業の実施，中学生体験学習や学校祭における出張講義や体験学習の実施，各学年進路ガイダンスにおける学校概要説明など。これらの事業を通して，本校の生徒が早期に高度な学びを体験し，入学後のミスマッチを防ぎながら将来の進路選択を具体化できるというメリットがあると感じている。また，本校の生徒にとっては普段できない体験ができ，新たな発見にもつながっている。

（2）地域連携活動

＜五一高じゃわめき隊＞

正式名称…市民団体じゃわめき隊プロジェクト

本校の「じゃわめき隊」とは学びの場，活動の場を学校から地域へと移し，様々な人との関わりを通して地域貢献をしていく団体である。主な活動事例は以下のとおり。

①「Family café あづま～るボランティア」…地域の子供たちの居場所作りを目指し，月に１度のペースで活動している。子供たちが楽しめるような企画を考えたり，子どもたちと一緒に遊んだりしている。

②「メバ焼き復活プロジェクト」…以前中里高校さんが取り組んでいた活動を引き継いだもの。中泊町と言えばメバル…タイ焼きならぬメバ焼きを通じて，中泊町の地域活性化に貢献させていただいている。

③「OSAGARIBAKO プロジェクト」…不要となった衣類や文房具を地域の皆様から回収し，カンボジアに届ける活動。現地の方とオンラインで打ち合わせてカンボジアの現状を知り，生徒たちの視野も広がった。

これらの活動を通して，人と話すことが怖くなくなった，自分に自信が持てた，将来の目標が決まったなど生徒からは感想が聞こえてきている。また，これらの経験は生徒自身の成長にもつながり，自分の希望進路に向けた取り組みの中で活動報告書や志望理由書などに活用している。

８ 最後に

今後の進路指導は「どこに合格させるか」という出口指導だけではなく，激変する社会を生き抜くための「主体的・自立的な生き方を育むキャリア教育」が必要だと考える。そのため，進路指導に携わる者として生徒が自ら選択肢を見つけ，決断し，行動できる力をどう育てるかということを念頭においた進路指導を実践していきたい。また、教師や指導者が教え込む指導ではなく，伴走し引き出す立場として関わり，生徒の主体的な進路選択を促していきたい。そして、現在本校で行っている進路指導の具体的な取り組みについて検証し，さらにブラッシュアップしていきたいと考えている。

これからも本校の特色を活かした進路指導を実践し、教育活動全体を通して，計画的かつ組織的な指導を目指していく。

【 就 職 系 分 科 会 】

地域に学ぶ進路指導 ― 進路選択力の育成を目指して ―

青森県立むつ工業高等学校　　傳法　宏美

１　はじめに

本発表では、本校で進めている進路指導の全体像と、特に力を入れている「地域企業や大人との接点を増やした実践」について報告する。

２　単なる「マッチング」から「進路選択力」の育成へ

就職先を選ぶ際、生徒は「条件がよいから」「知っている企業だから」といった理由のみで選択肢に加える傾向が見られた。求人票は1年生から閲覧できるようにしているものの、実際に進路選択を意識して閲覧するのは2年生の冬の面談直前である場合がほとんどであった。その結果、もともと知っている企業や周囲から紹介された企業を安易に選択し、さらに「教員から紹介された企業＝勧められた企業」と受け取るなど、主体的に視野を広げようとしない状況が見られた。こうした状況は、採用後のミスマッチや早期離職につながる可能性がある。本校が目指すのは、生徒自身が自らの適性や希望を把握し、自らの意思で進路を選択する「進路選択力」の育成である。私自身、むつ市に長く居住しているが、進路指導主事となった当初は地域企業や企業グループの実態について十分な知識を有していなかった。地域には、普段生活しているだけでは見えてこない魅力的な企業や仕事が数多く存在する。これは生徒にとっても同様である。まずは地域にどのような企業があり、どのような人々が働いているのかを知ることから始め、生徒や教員の視野を広げ、主体的に情報収集し判断する姿勢を育成したいと考えた。

３　むつ工業高校における進路活動の全体像

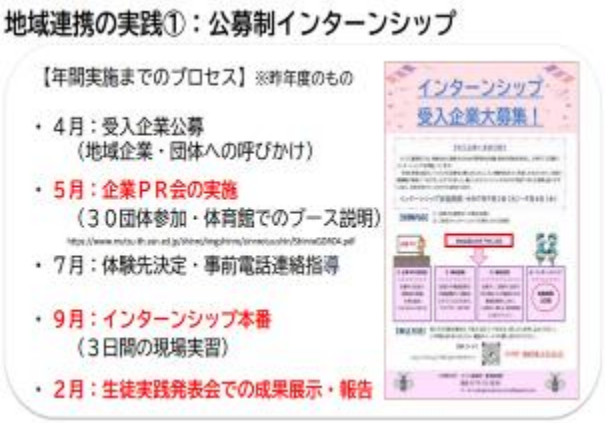
本校の進路活動の大きな特徴は、1 年生からの系統的な指導を実施している点である。1 年生では、学科別企業見学、先輩による進路体験発表会、県主催企業 PR イベントなどを通して、働くことへの理解を深める。2 年生では、企業 PR 会やインターンシップへの参加を通して企業と直接関わり、年度末の四者面談で具体的な進路方針を固める。3 年では、応募前職場見学を経て採用試験に臨む。この一連の取組を通して、生徒だけでなく教員も積極的に地域企業と関わり、地域産業への理解を深めることを重視している。

４　地域連携の実践

（1）公募制インターンシップ

従来は学科ごとに企業へ依頼していたが、一昨年度から進路指導部が中心となり、「協力企業公募制」へ移行した。今年度で3年目となる。

初年度は商工会議所等の協力により 28 団体の参加を得た。昨年度からは募集範囲をむつ市内だけでなく六ヶ所村や風間浦村など周辺地域にも拡大した。その結果、昨年度は36団体、今年度は33団体の協力を得て実施することができた。



体験先決定の前段階として、5 月に企業 PR 会を開催している。体育館に約 30 団体の事業所を招き、各ブースにおいて業務内容やインターンシップ体験内容について説明を行っていただいた。生徒にとっては、既知の企業に対する新たな発見や、これまで関心のなかった職種への興味関心を高める貴重な機会となっている。従来のように割り当てられたリストから選択するのではなく、働く人の思いや具体的な業務内容を直接聞いた上で体験先を選択することで、主体的な進路選択につながっている。企業側も非常に熱心であり、卒業生である若手社員を同行させたり、機材やスクリーンを活用したりするなど、生徒とのつながりを重視した PR を行っている。

9 月に実施した 3 日間のインターンシップでは、機械、電気、設備、建設、行政など多様な分野において、溶接、測量、配線などの実践的な体験活動を行った。生徒の振り返りからは、技術的な学びだけでなく、「危険予知活動

や安全管理の重要性」「挨拶や敬語などの基本的マナー」「職場におけるコミュニケーションの必要性」など、社会人として必要な資質を学んだ様子がうかがえた。また、事前には興味関心が低かった分野についても、「実際に体験してみたら非常に面白かった」「参加してよかった」といった感想が多く見られた。

2 月には学習成果のまとめとして生徒実践発表会を開催した。本校で従来行っていた課題研究発表会を発展させたものであり、近隣中学校および大湊高等学校とともに下北文化会館で実施した。地域企業関係者にも参加を呼びかけ、インターンシップ体験発表やアンケート結果の展示を行った。参加企業からは、「次年度はさらに工夫して生徒を受け入れたい」などの前向きな評価を得ることができた。

（2）むつライフ座談会

地域で魅力的に活躍している大人を招き、放課後 30 分間という短時間で気軽に交流する企画である。第 1 回はメンソーレ川端氏を講師として迎え、1 年生から 3 年生までの有志 17 名が参加した。地域に対して「何もない」と感じる生徒に対し、「地域でも充実した生き方ができる」という実感を与え、シビックプライドの醸成を図ることを目的としている。手探りの取組ではあったが、生徒にとっても教員にとっても、地域での生き方や働き方を前向きに捉え直す有意義な機会となった。

5　生徒の変容　生徒の声・感想から見える意識の変化

一連の取組を通じて、生徒の意識に変化が見られた。感想には、「給与や企業規模だけでなく、やりがいや職場の雰囲気も重要であることに気付いた」「働くことは社会に貢献することであると理解できた」「進路の選択肢が大きく広がった」といった内容が多く見られた。

これらの変化からは、「与えられた条件の中から選ぶ」という受動的な姿勢から、「地域と自分との関わりを考えながら主体的に将来を選択する」という進路選択力の芽生えを確認することができる。



6　データで見る本校の進路実績と地域定着の現状

本校の進路実績と地域定着の状況について述べる。

卒業生は、むつ市、六ヶ所村、東通村などに所在するエネルギー関連企業、インフラ関連企業、製造業を中心に就職し、地域産業を支える人材として活躍している。令和 7 年度卒業生の就職先のうち、前年度インターンシップ実施企業は 8 社であった。また、令和 8 年度 3 年生の就職希望先のうち、前年度インターンシップ実施企業は 17 社となっている。

これらの結果から、生徒が地域企業と継続的に関わることで、「名前だけ知っている企業」が「仕事内容や雰囲気まで理解している身近な選択肢」へと変化していることが分かる。高校時代に地域と深く関わる経験は、地域定着のみならず、将来進学した生徒の U ターン促進にもつながる基盤となると考えられる。

7　成果と今後の課題　　より実りある進路指導を目指して

本実践の成果として、1 年生からの体系的な進路指導モデルが確立したこと、毎月発行する進路通信「進路 GORO」による情報発信が定着したこと、生徒の勤労観・職業観が向上したことが挙げられる。

今後の課題は次の 3 点である。

第 1 に、保護者との価値観の共有である。求人票の見方や地域企業に関する最新情報について、保護者との共有をさらに進めていく必要がある。第 2 に、キャリア教育の探究化である。インターンシップでの学びを課題研究や探究学習とより深く結び付けていく必要がある。第 3 に、持続可能な地域連携の維持である。協力企業や団体の負担にも配慮しながら、良好なパートナーシップを継続していく必要がある。

最も重要なことは、生徒一人一人が自信をもって「自分の進路は自分で決める」と言えるようになることである。地域という豊かな学びの場で多くの大人と出会い、さまざまな経験を積むことで、生徒はたくましい進路選択力を身に付けていく。今後も地域の関係者や教職員との連携を深めながら、生徒の未来を切り拓く進路指導を推進していきたい。

部　会　の　動　き

令和８年４月～令和９年３月

１　第１回代表者会議並びに専門委員会

5/25(月)　青森市　アピオあおもり

参加者　代表者会議　95 名、進学専門委員会　46 名、就職専門委員会　49 名

代表者会議

(1)令和７年度庶務報告・決算報告

(2)令和８年度事業計画案・予算案

(3)役員改選　部会長：杉森　晋（五所川原高校校長）　副部会長：藤田　明彦（五所川原農林高校校長）
進学指導専門委員長：齋藤　郁子（五所川原高校）　就職指導専門委員長：松橋　涼（五所川原農林高校）
理事 15 名（地区責任者を含む）　監事２名

進学・就職専門委員会：アンケート回答を基に各校で情報交換

２　東北地区高等学校進路指導協議会第１回各県会長・事務局長会議

5/22(金)　宮城県多賀城市　宮城県多賀城高等学校　　部会長・事務局長出席

３　全国高等学校進路指導研究協議会理事会

7/29(水)　東京都　国立オリンピック記念青少年総合センター　　部会長・事務局長出席

４　全国高等学校進路指導研究協議大会

7/30(木) 7/31(金) 東京都　国立オリンピック記念青少年総合センター　　事務局長参加

５　第 50 回高教研進路指導部会総会及び研究大会

10/ 6(火)　青森県総合社会教育センター

参加者 90 名（進学系 49 名・就職系 41 名）　外部講師３名

研究テーマ「『新しい時代を切り開く力』を育む進路指導・キャリア教育の在り方」

全体講演　「『新しい時代を切り開く力』を育む進路指導・キャリア教育の在り方」

文教大学　教授　　新井　立夫　氏

第１分科会（進学指導）

研究発表①　「生徒が自走できる進路指導を目指して」

青森東高等学校　　赤平　紘文

研究発表②　「本校の進路指導について」

五所川原第一高等学校　佐藤　大輔

分科会別講演「『自らの人生を舵取りする力』をどう育むか」

ベネッセ教育研究所イノベーションセンター主任研究員　　山下　真司　氏

第２分科会（就職指導）

研究発表　「地域に学ぶ進路指導ー進路選択力の育成を目指してー」

むつ工業高等学校　傳法　宏美

分科会別講演　「『ＡＩで手抜き』ではなく『手厚く』する！
～生徒の本音を引き出し、合格へ導く進路指導のアップデート～」

青森県若年者就職支援センター　センター長　　戸田　富重　氏

６　東北地区高等学校進路指導協議会研究大会　山形大会

10/23(金)　山形県酒田市　山形県立酒田光陵高等学校　　部会長・事務局長出席

７　東北地区高等学校進路指導協議会第２回各県会長・事務局長会議

10/23(金)　山形県酒田市　山形県立酒田光陵高等学校　　部会長・事務局長出席

８　新規高等学校卒業者就職問題連絡会議(予定)

2/ 5(金)　東京都　中央合同庁舎　　就職専門委員長出席予定

９　第２回代表者会議並びに専門委員会（予定）

2/18(木)　青森県観光物産館アスパム

代表者会議：令和８年度庶務報告・会計中間報告・ローテーション確認
進学専門委員会：講演（学校法人河合塾　　高橋　章　氏)、アンケート回答を基に情報交換
就職専門委員会：アンケート回答を基に情報交換

研 究 テ ー マ

紀要No.	年度	研究テーマ	会場	会員数(一・二希望計)	大会参加数	大会発表者数
55	22	新学習指導要領を視野に入れたキャリア教育の充実	八戸プラザホテル	229	会員 115 全体 175	6
56	23	『生きる力』を育む進路指導はいかにあるべきか	青森県総合社会教育センター	239	105	6
57	24	『生きる力』を育む進路指導はいかにあるべきか	青森県総合社会教育センター	226	105	6
58	25	『生き抜く力』を育む進路指導はいかにあるべきか	青森県総合社会教育センター	203	113	6
59	26	『生き抜く力』を育む進路指導はいかにあるべきか	青森県総合社会教育センター	209	110	6
60	27	『学び続ける』社会で生き抜く力を育む進路指導の在り方	青森県総合社会教育センター	209	140	6
61	28	『生き抜く力』を育む進路指導はいかにあるべきか	青森県総合社会教育センター	234	97	6
62	29	『生き抜く力』を育む進路指導はいかにあるべきか	青森県総合社会教育センター	224	94	6
63	30	『生き抜く力』を育む進路指導はいかにあるべきか	青森県総合社会教育センター	221	104	6
64	元	『生き抜く力』を育む進路指導はいかにあるべきか	青森県総合社会教育センター	223	113	6
	2	中止	－	－	－	－
65	3	『生き抜く力』を育む進路指導はいかにあるべきか	オンライン	203	83	4
66	4	『生き抜く力』を育む進路指導・キャリア教育の在り方	オンライン	187	会員 50 全体 82	6
67	5	『生き抜く力』を育む進路指導・キャリア教育の在り方	青森県総合社会教育センター	185	84	6
68	6	『生き抜く力』を育む進路指導・キャリア教育の在り方	青森県総合社会教育センター	171	81	6
69	7	『生き抜く力』を育む進路指導・キャリア教育の在り方	青森県総合社会教育センター	172	97	6
70	8	『新しい時代を切り開く力』を育む進路指導・キャリア教育の在り方	青森県総合社会教育センター	156	90	6